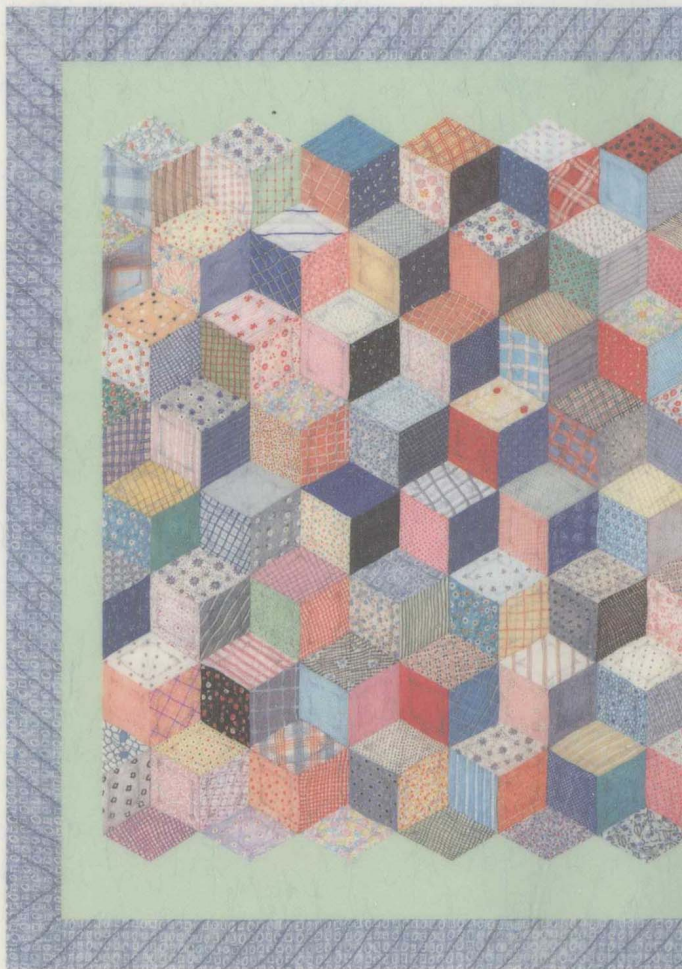


女たちの歌声

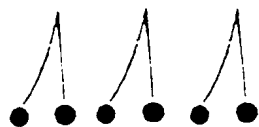
《増田れい子の本②》



大月書店

《増田れい子の本②》

女たちの歌声



大月書店

増田れい子（ますだ れいこ）

1929年東京生まれ。

1953年東京大学文学部国文学科卒。

同年毎日新聞東京本社入社。社会部、サンデー毎日編集部、学芸部編集委員などを経て82年「女のしんぶん」編集長、83年大手紙初の女性論説委員に、84年度日本記者クラブ賞受賞。91年よりフリージャーナリスト、エッセイストとして活動。

主な著書『インク壺』暮しの手帖社、『白い時間』講談社、『沼の上の家』『ひとを愛するということ』労働旬報社、『花のある場所』大月書店など。

女たちの歌声

増田れい子の本②

1994年12月9日第1刷発行

定価はカバーに表示してあります

1995年7月14日第2刷発行

著者◎ 増田 れい子

発行者 平 智 享

〒113 東京都文京区本郷2-11-9

発行所 株式会社 大 月 書 店

印刷 太平印刷
製本 中條製本

電話(営業)3813-4651(編集)3814-2931 振替 00130-7-16387

Printed in Japan

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製(コピー)することは法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合にはあらかじめ小社あて許諾を求めてください

ISBN4-272-60042-7 C0395

増田れい子の本②

女たちの歌声／目次

ともだち

パートナー 9

丹波の女たち 11

よき友 13

求む名案 17

美しい死 19

たたかう友 21

マリア様の絵 23

ファーストダンス

ふるさと婚 29

ファーストダンス 30

万智歌 32

女のカベ 34

温かい家庭 37

コタツ婚 39

優しい夫 46

優しくない夫 48

「人形の家」の住人たち 50

女が変える時代

女の瀬戸際 男の往生際 57

いのち危うしの時代に 62

ある日突然 65

女の労働のいたましさ 67

勇気ある行動 69

「不況」と女性労働者 73

「女は内」の時代は過ぎて 76

生きる智謀 81

女性にとって姓名とは (1) 85

女性にとって姓名とは (2) 90

男社会のなかで 95

変えるのは女性 101

家族のゆくえ

「頼みたいことがあるんだよ」

109

秋思 112

別れ 115

家族の時間 120

家族に吹く風 127

家族のゆくえ 132

女たちの歌声

春がきた 139

香川京子さんの祈り 143

男の戦争・女の戦争 147

長崎のひと 152

ローザ・ルクセンブルク 154

一九四五年八月十五日 157

『女のしんぶん』の「戦争と私」のこと 165

ハンドバッグのお守り、憲法 175

アリの一歩 182

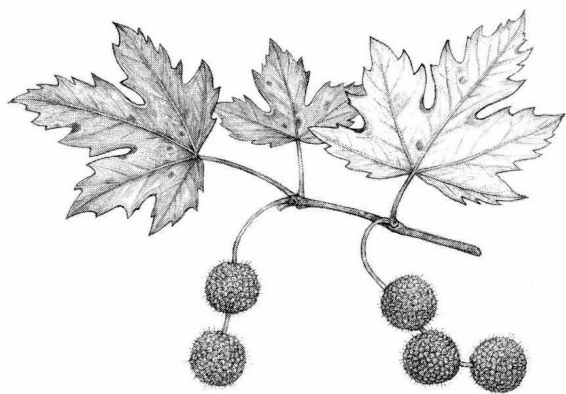
ドメステイック・ヴァイオレンスと女性 185

リプロダクティブ・ヘルス、ライツ考 195

あとがき 201

カバー・本文挿画 装幀 田中淑恵
 渡 まゆ

ともだち



パートナー

ヴェランダにひよどりがちよくちよくやってくる。トーキョー砂漠の小さな団地であるが、ひよどりはそこが気に入ったらしい。愛きょうのある鳥ではない。柄が大きくて、すすけたように黒くて、声大きい。しかし、生きものがやってきてくれるのは、嬉しい。見ていると、ひよどりはつがいである。どちらが雄なのか雌なのかさっぱりわからないが、一羽が声高に何ごとかしゃべると、一羽がそれにこたえてとび立つなり、とび来るなり緊密に情報を伝えあっている。

ふるさとの家は、いまだき珍しい照葉樹林のなかにあるのだが、ひよどりの数も多い。庭に睡蓮用の大きな水がめを置いてある。ひよどりがときおり来て、派手に水浴びをして行くのだが、一羽はもう一羽が水浴びしている間は別の場所に陣どって、しきりに見張りをする。終わると、安心したようにもう一羽が水しぶきをあげ、浴び終わったのが見張りをしている。

ひよどりはペアを組んで実に見事に行動する。もともとは山林のなかに住む鳥らしいが都会にも適応して生きのびていると聞く。それというのも、ひよどりがパートナーとペアを組んで情報

を交換し、危険を切り抜け、えさを確保し生活する能力にたけているからだろうと思う。緊密にペアを組めない生きものは過酷な条件のなかではうまく生きのびて行けないのではないだろうか。

よいパートナーを得ることは、人間の一生にとって最高の幸福ではないか、と思う。もともと人間は一人では生きられない。本能的にそう思うし、経験上からもみなそれを知っており肯定している。人一人の能力には自ら限界があり全能というわけには行かない。ひとつに秀でれば、他がおろそかになる。いまひとつのことに集中していれば、別のことには神経がまわらぬ。前は見えていても、背面はしかとわからぬ。

右を見ているとき左を注意してくれるひと、上をのぞいているとき、下に気を配ってくれるひと、未来に心を向けているとき、過去に関心を持つてくれるひと、現実にとだわるとき、理想について示唆してくれるひと。つまり、自分にはそのときその場でカバー出来ない部分をカバーしてくれるひとが必要である。それがパートナーだ。そしてまたひととは誰しも心のなかにどうしようもなく弱くもろいものがかえこんでいる。過つこともあり失敗することもある。心に傷を負うこともある。それら弱い部分が無条件に包みこみ、やさしく癒してくれる人が欲しいのである。パートナーとはそういうとき役立つ気立てのやさしい、ふところの深い、決して裏切らない母性的なひとのことである。

パートナーというのは、いっしょに仕事をし、あるいは暮らし、つまり共に生きるときおたがいによりよく生きられる者同士のことである。同志である。

それは具体的に、きょうだいの一人であつたり、クラスメートであつたり、ふとしたことで知りあつた仲間であつたり、夫であつたりする。そうして、世間で「あのひとはいい仕事をしている」といわれるひとは、たいていすばらしいパートナーに恵まれている。その二人が力を合わせると二乗になる間柄がパートナーだ。すてきなパートナーにめぐりあいたい。私の友人に、成長した娘さんをよきパートナーに育てていきいき仕事に取り組んでいるひとがいる。女性が仕事で成功するには女性のパートナーの存在が決め手のようだ。

丹波の女たち

すばらしい女たちに会いに丹波へ出かけた。彼女たちは三十年來、生活改善グループの料理講習会をきっかけに絆を結んで、自分自身の生き方を変えてきた。すばらしい女たちという意味はそこにある。

小春日和の一日、大堰川おおいがわのほとり、かやぶき屋根のTさんの家に集まつた十八人の丹波の女性たちはよく聞きよく語りよく笑つた。

生き方を変え、暮らしをよくするためにはいまちばん「かなん」（かなわない、辛い苦しい）人が「かなん」とほんまのことをクチに出すことだ、ほんまのことを言うことでウソの生き方が消えてゆくのだということを彼女たちは発見し、体験としてつみ重ねてきたのである。

憲法はあらたまり、戦後は四十六年もたった。国連婦人の十年運動以来、女性の躍進は目ざましい。しかし、いまだに「女は黙つとれ」の古い掟が生き続けていることも事実だ。

丹波の女性たちは、この掟にずっとさからってきた。ダムの建設で大堰川の水かさが減ったのを機会に川の水に頼る暮らしはもう「かなん」と声をあげ、尻込みする男たちには目もくれず簡易水道を引く運動を展開、水汲み労働から自分たちを解放した。

家の外に活動の場をつくり出した女たちに対して、夫（男）たちはうろたえ、邪魔し、ついで感心した。女たちはそのなかで「自分が変われば人が変わる」ことを知った。また昼日中、髪を洗って姑にひどく非難されたある女性は「髪を洗わせて」と必死でものを言って髪洗いの自由をかちとった！

彼女はその経緯を語りながら「一番言いにくいことを一番言いにくい人に一番言いにくい場所で言ったのです」と表現した。

さて、その日の集まりのさいごに、ひとりが言った。「私、きょう帰ったら夫に、今月から毎月五万円、私が働いたぶんをもらいたいといっています」決意が彼女を美しくしていた。

米つくり野菜つくり、家事労働一切を背負って五十年、働き通してきた。しかし収入のすべて

は夫の口座に入り、自由になるおカネを持ったことがない。彼女は五十年目にして言いにくいことを言いにくい夫に言う決断をしたのだった。

翌日、料理講習会にやってきた彼女は包丁をにぎったあと「夫は言葉もなくだまりこくって寝られない様子でした」と報告した。夫の反論は、なし。五十年目のもの言いは成功の兆だ。女たちはドツとわいた。女が変われば社会は変わる。

よき友

手も足も大きい。

手の方はどうということもないが、大きい足にはかせる靴には苦勞する。二十四半をはく。いまだき二十四半の靴をはく女性に珍しくない。つい先だっても、あるコーナーで、はきよさそうな布の靴を見つけたので、まあ試しばきだけでもさせてもらおうと、店の人に申し出たら、「ハイ」と意気こんで探してくれたが、二十四半は一足も残っていなかった。売り切れ申し候。二十四半をはく足の大きな女性がそれだけ増えてきた証拠だ。

しかしひと昔前だと、二十四半は少数派で、恥じ入りながら買ったものだ。私は、三十年来新聞記者稼業を続けてきて、新聞記事は足で書け、と教えられ叩きこまれてきただけに、年中、ガタガタ歩きまわって、モノにあい、人にあい、事实に学んで書くのが習性になっている。その間、何十足の靴をはきつぶしてきたか。そのうち足指にはにつきき魚の目が多数生じ、二十四半をはいても痛くて痛くてたまらない。大きいうえに、魚の目持ちときは、たいていの靴がきつくてダメだ。あつらえてもそうそうフィットしないもので、靴というと見ただけ、思っただけで、魚の目が痛むのである。魚の目手術というテもある。しかし経験者によると、切っても切ってもあれは出てくるそうである。

私は、靴に希望を持つのはやめよう、とあきらめた。ところが窮すれば通ず、とはよくいったものだ。私の年来のやさしい女友だちがあるとき、

「ねえ、とってもはきやすい靴があるんだけど……」

と遠慮がちにいった。そんなものにはだまされたい、と私は思いつつ、いやこの人ならだまされてもいいと思ひもした。独身で働き続けてきて、私の古い古い恋人と知りあいという経緯もあった。いいわよ、はいてみるわよと返事して、早速一足とり寄せてもらった。同じ二十四半でも、この店のは、たっぷりに出来てるから二十四で大丈夫よ、と彼女はいう。あぶないから、魚の目のこともあるし、じゃ、両方とってみて……ということになって、二足、目の前に並んだ。

まあ、これは見事に何のヘンテツもない黒の革靴だ。先は丸く、カカトは三センチ足らず、深